

## リクライニング・コンサート

リクライニング席で、最高の演奏をリラックスした雰囲気の中で聴けるユニークな60分コンサート！

### 第87回 チェンバロの日

#### バロックの真骨頂

#### クリスティーネ・ショルンスハイム（チェンバロ）

#### 古部賢一（オーボエ）

2012年2月23日 [木]

15:00 start (14:30 open)

19:30 start (19:00 open)

1回券 普通席 2,800円

リクライニング席 3,300円 (1ドリンク付)



後援：ドイツ連邦共和国大使館

確かな伝統を踏まえた演奏がヨーロッパで高く評価されているショルンスハイムと、日本を代表するオーボエ奏者のひとり、古部賢一の共演。ショルンスハイムの来日時に意気投合しアンサンブルを重ねている彼らが、新境地を披露します。

#### プログラム

- ◎J.S. バッハ：「6つのトリオ・ソナタ」より
- ◎J.S. バッハ：「平均律クラヴィーア曲集 第2巻」より
- ◎J.S. バッハ：「トッカータ」より

#### クリスティーネ・ショルンスハイム（チェンバロ） Christine Schornsheim, cembalo

ベルリンのC. P. E. バッハ音楽高校、ハンス・アイスラー音楽大学でピアノを学ぶ。1983年まで、ポツダムのハンス・オットー劇場でソロ・レペティートルを務め、またライブツィヒにてチェンバロ奏法と通奏低音をワルター・ハインツ・ベルンシュタインに学ぶ。'85年以降、チェンバロ奏者としての活動を始めながらも、グスタフ・レオンハルト、トン・コープマン、ヨハン・ゾンライトナー、アンドレアス・シュタイアーらのマスタークラスで研鑽を積み、これまでにサー・ゲオルク・ショルティ、小澤征爾、クラウディオ・アバド、レオポルト・ハーゲル、ペーター・シュライアー、マーカス・クリード、ゲオルグ・クリストフ・ビラー、ヘルムート・リリング、ギルバート・ヴァルガ、ヘルマン・マックス、クリストフ・ポッペンらと共演している。数々の音楽祭にチェンバロまたフォルテピアノのソリストとして招かれ、シュレスヴィヒ=ホルシュタイン音楽祭、シュトゥットガルト・ヨーロッパ音楽祭、ウィーン・オルガン・フェスティバル、ニュレンベルク・オルガン週間、ベルリン・バッハ音楽祭、アンスバッハ・バッハ週間、ベルリン、レーゲンスブルク、ヘルネの古楽音楽祭、ブリュール城コンサート、国際バッハ音楽祭などに出演。'97年、2000年には、サイトウ・キネン・フェスティバル松本に招かれている。さらに、ヨーロッパのほとんどの国でコンサートを行っているほか、イスラエル、日本、アメリカにも登場、各国の重要な文化都市で数多く演奏している。1994年、ペーター・シュライアーとの共演で、フォルテピアノ奏者としてデビュー。また、アンドレアス・シュタイアーとの2台チェンバロ・コンサートをはじめ、クリストフ・フントゥゲポルト、ウルズラ・ブンディース、マリー・ウティゲルなど著名な音楽家たちと共演。2003年秋より、ミュンヘン・カンマームジークのメンバーであり、さらにイタリアのアンサンブル・ゼフィロと度々演奏している。多くの優れた録音には、『ゴルトベルク変奏曲』をはじめとするJ.S. バッハのチェンバロ作品やモーツァルトのピアノ協奏曲があるほか、ベートーヴェンのピアノとフルートのための作品を、クリストフ・フントゥゲポルトのバロック・フルートとともに、同編成での初録音としてリリース。さらに、チェンバロとオルガンの両方による通奏低音の作品もある。1999年、C. P. E. バッハ、W. F. バッハ、J. Ch. バッハによる3つのチェンバロ協奏曲を収めた録音（カブリッチョ・レーベル）はエコー賞を受賞。2005年春にリリースの、5つの異なる楽器で演奏された『ハイドン：ピアノ・ソナタ全集』は、ドイツのレコード批評家賞、フランスのディアパゾン賞、およびエコー賞を受賞している。『J.S. バッハ：ハーブシコード作品集』は日本語解説付き国内仕様盤として東京エムプラスよりリリースされている。1988年からライブツィヒ音楽大学で助手を経て、'92年11月、チェンバロ学科とフォルテピアノ学科の教授に就任、古楽研究の発展に大きな貢献を果たしている。2002年10月よりミュンヘン音楽大学チェンバロ学科教授。1992年より、国際チェンバロ・コンクール審査員。

#### 古部賢一（オーボエ） Ken-ichi Furube, oboe

東京芸術大学在学中の1991年、新日本フィルハーモニー交響楽団首席オーボエ奏者に就任。'91年から翌年にかけて、アフィニス文化財団海外研修員としてドイツ国立ミュンヘン音楽大学大学院に留学。これまでに、オーボエを中山和彦、北島章、小畑善昭、小島葉子、ランダル・ヴォルフガング、ギュンター・パッシンに、また室内楽を村井祐児、中川良平の各氏に師事。小澤征爾指揮新日本フィル定期公演をはじめ、ジャパン・チェンバー・オーケストラ、イタリア合奏団、ミラノ・スカラ弦楽合奏団、ザルツブルク室内管、東京フィル、N響室内合奏団など国内外の数多くのオーケストラのソリストとして、また、ジャパン・チェンバー・オーケストラ、オイロス・アンサンブル、いずみシンフォニエッタ大阪などのメンバーとしても活躍している。サイトウ・キネン・フェスティバル松本、宮崎国際音楽祭、木曾音楽祭などにも定期的に出演。2005年、東京で行われたラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポニに出演し、'09年にも再び出演した。ハンブルク北ドイツ放送響、ベルリン・ドイツ響、シュトゥットガルト室内管などにも客演首席奏者としてしばしば招かれている。リサイタルや室内楽にも積極的に取り組み、ドイツを代表するチェンバロ奏者、クリスティーネ・ショルンスハイムとのデュオを国内およびライブツィヒ・バッハ博物館で行なうなど、バロック演奏でも高い評価を得ている。近年には古楽奏者としてもデビューした。現代作品の演奏も数多く手がけ、メシアンの遺作「4のコンセル」やシュニトケ「オーボエとハーブのための協奏曲」などを日本初演している。'06年には東京オペラシティコンサートホールで開催された武満徹没後10年特別企画公演で、大作「ジェモー」を若杉弘・高関健指揮東京フィルらと共演、絶賛を浴びた。'07年には、東京国立科学博物館講堂にてオーボエの進化をたどるレクチャーコンサートを行ない、チャルメラからコール・アングレ、オーボエ・ダモーレなどオーボエ属の楽器を総動員した「オーボエ講座」が絶賛を博した。近年は、ギターの前田香津美、鈴木大介とのコラボレーションなど、ジャンルを超越した活動も展開している。レコーディングは、ソロ・デビュー・アルバム『ドルチェ』、ミラノ・スカラ弦楽合奏団と共演した『アマ・ビレノイタリア・バロック協奏曲集』（以上キングレコード）、鈴木大介（ギター）とのデュオ・アルバム『DAYDREAM』（フォンテック）などのCDをリリースしている。第10回出光音楽賞をオーボエ奏者として初めて受賞。現在、東京音楽大学、昭和音楽大学非常勤講師、兵庫芸術文化センター管弦楽団アソシエイト・プレーヤー。第8回・第9回国際オーボエコンクール・軽井沢の審査員を務めるなど、後進の指導にもあたっている。